

---

**廻り廻るわたしと きみと**

行見 八雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

廻り廻るわたしと きみと

### 【Nコード】

N1009T

### 【作者名】

行見 八雲

### 【あらすじ】

気が付けば、前世の記憶を持ったまま、異世界に転生していた元勇者。チートな能力を持ったまま入学した魔術学園で、彼女は、前世で自分が倒した魔王の生まれ変わりと出会う。

前世で、魔王と交わした約束を守るため、彼女は彼と心を通わせて行く、そんなお話です。

## 1・入学式にて。（前書き）

他で連載している『華の降る丘で』より前に書いたお話なので、主人公の性格や、設定などが、非常に似ています。

そして、主人公最強ものです（作者が好きなもので……；）。

さらに、激しく不定期および亀更新になると思われます。

それでも許せると仰って頂ける方は、どうぞ読んでみてやって下さい。

## 1・入学式にて。

瘴気に覆われた城の最奥で、すでに正気を失った魔王と戦った。

魔王の魔力は強大で、容赦のない攻撃が続いたけれど、狂気に浸り冷静さを欠いた魔王の隙を突き、私は何とか魔王を倒した。

石の床に倒れ伏した魔王の、しだいに力を失いゆく瞳が最後に私を映す。

その黄金色の眼の中に、蘇ったのは理性と　　。

最後に魔王が呟いた言葉に、私は囚われたのだ。

私が過去の記憶を完全に取り戻したのは、この世界に産まれてから3年が過ぎた頃だった。

それまでは、断片的に蘇っていた記憶が、この頃ようやく繋がったのだ。

そうして自我をも取り戻した私は、現在の自分の状況についての情報収集を行った。

今の私の名は、アリアージュ・ハージス。

貴族制度の残っているこの国の、伯爵家の次女のような。  
上には、5歳離れた兄と、3歳離れた姉がいる。

容姿は、父親譲りの黒髪に、母親と同じ藍色の瞳。

精悍な顔つきの父親と、たおやかでおっとりとした優しい顔立ちの美女である母親の血を受け、特に母親に似た私は、僅かに目尻の下がったふわふわした雰囲気的美少女だ。

あ、ちゃんと客観的に見てよ！家族も家の者以外の人も、それに褒めてくれるので、私の美的感覚がずれてるわけでもないと思うし。

でも、一番のお気に入りは母親似の藍色の目です。

自分のをじっくり見たことはないけど、母様の目を見ると、きらきらとした不思議な色合いで本当に綺麗なの。

私のも同じらしいから、かなり嬉しい。

いつか一人きりの部屋で、じっくり見てみようと思う。人

前で、鏡に映った自分見ながらうっとりしてたら、なんか、あれだしね…。

あ、それで、この世界の名は、シテというらしい。今の前の生  
いわゆる前世で、私が暮らしていた地球とは違った。

けど、微妙に私には馴染みの世界だ。何故なら、前世で、私は今から約百年前にこの世界に召喚されたことがあるからだ。魔王を倒

す勇者として。

しかし、せっかく無事に魔王を押し、元の世界に戻り、生を全うしたというのに、この世界に生まれてしまうとは………。いったい何の因果なのか。

まあ、そのシテの中の最も大きな大陸に存在する、3国の一つのうちの一つが私の生まれた国、ゴルギアス。

この国は前に召喚された時には無かった国だ。あの頃は大陸丸々一つの国だったからね。

そして、この世界には魔法とか精霊とか　魔王とか、地球ではなかったものが当たり前に存在している。

そのせいか、前に召喚された時と人々の生活様様はあまり変わっていないように感じる。

生活はほとんど魔法によって補われているし、特に不便も感じないから、技術の発展などは必要ないからかもしれない。

そう、私は、魔力はあるものの魔法はほとんど使えない。

これも前回召喚された時と同じ。

何故ならば、私は精霊術師だからだ。

自我を取り戻した時に、わざわざ挨拶をしに来てくれたのは、前

回もお世話になった7種の精霊王達だった。

『おう、久しぶりだな。』と普通に話しかけてきた火の精霊王に、「おひさしぶりです。」とまだ覚束ない言葉使いで、複雑な思いで返したのは記憶に新しい。

まあ、今回も力を貸してくださるらしいので、助かるといえば助かる。

とはいえ、精霊王様方に直接力をお借りするなんて、世界存亡の危機でもない限り考えられないので、普段は近くにいる精霊に力を貸してもらっているんだけど。

そうして、7種の精霊術が使えることを特に隠すこともなく、私はすくすくと大きくなった。

前世の記憶があることは秘密だけれども。

そして、私が12歳になった頃、王都にある王立魔術学園への入学が決まった。

それまでの、勉強や作法なんかは、家の者に学んだり、家庭教師をつけて自宅で行っていたから、同年代の子たちと一緒に勉強するっていうのは、ちょっとドキドキするわね。

しかも、学園は、全寮制なんですって。一応、貴族の子息も多いということで、各自個室なのは助かったけどね。

そんなこんなで、入学式の日、私は何でも入試の成績が優秀だったということ、新入生代表の挨拶をすることになった。

勉強について、天才だとは言われてきたけど、まあ中身がそれなりに人生経験積んでるんだから、当たり前といえば当たり前かしら。

あと、7種の精霊術を使えるというのも、かなり珍しい。というか、現在では世界で私一人らしい。

百年前にも、一人いたらしいが　　前世の私ですね、はい。

というわけで、現在、広いホールの舞台の上にあります。

うつつ、それなりに経験を積んでも、緊張するものは緊張するわね。

特に、父兄の席では、私を見ながらひそひそと話をする人がちらほら見える。

自意識過剰じゃないですからね！視線はばっちり私に向いていますから！

何とか嘔まずに、事前に原稿を用意して暗記していた挨拶を終え、ほっと息を吐いて顔を上げた。

席に着いたまま、じっと私を見上げる、同じ新入生達の顔を、目を合わせないように見渡す。

その時感じた気配に、心臓がどきりとした。

風景となった生徒達の中で、その金が煌めく。

こうして私は再び彼に出会った。

## 2・彼との交流。

彼の現在の名は、リュカ・ディアス。

なんでも、桁外れに魔力が強いらしく、その能力を買われてこの学園に入学することになったらしい。

そして、彼は孤児院の出で、そのため貴族の子息が多いこの学園では良くも悪くも目立つ。

だから、どこまでが本当かは分からないけど、彼の噂は何もしなくても私の耳に入ってきた。

いわく、魔力の暴走が原因で親に捨てられたとか、よく魔力を暴走させては周りの物を破壊したり、人に怪我を負わせたりするとか。

だから、この学園への入学は、主に魔力の制御を学ぶためみたいね。

今はまだ、魔力の制御が完璧ではないから、誰でも傍に寄ればその桁違いの魔力がわかる。

あと、金色の目って、魔法能力　　魔力が高く魔法属性への適性が高いってことね　　が高い人に現れるんですって。

能力が高ければ高いほど、純度の高い金色になるみたい。それこ

そ、彼の眼みたいに。

ちなみに、私は魔力自体は多いけれど、魔法への適性が低いから、瞳に金色は混じってないのね。

まあ、そんな彼だから、周りの人はほとんど彼には近づかない。

庶民だと貶している人もいるし、彼の暴走を恐れている人も多い。

だから、私が見る限り、彼はいつも一人でした。

そんな彼を見ると、あの時の言葉が蘇る。

彼の膨大な魔力と、どの属性の魔法も使いこなせる能力………ほんと、魔王やってた前世と同じね。

魂の素質によるものだから仕方がないのだけれど。

でも、今はまだ魔王じゃない。

大丈夫。約束は守るわ。

それは、ある演習の日だった。

全員が広大なグラウンドに出て、二人が一組になって、互いに魔法を試してみるのね。

うちのクラスは30人で、女子が3人に残りが男子。まあ、家の都合だったりとかで、こういった学園に通う女子はまだまだ少ないのが現状なのよ。

徐々に、二人組が出来つつあるなかで、彼は端のほうで地面を見ながらぼつりと立ってた。

周囲からかけられる誘いの声に丁寧な断って、私はずんずんと彼のほうへ近づいて、彼に声をかけた。

「一緒に、組みましょう?」

私の声に、彼は驚いて顔を上げた。周囲でも、ざわざわと驚きの声がかかる。

確かに、私の見た目は、若干低めの身長に、か弱いというか繊細というか、とにかく風が吹けばふわふわ飛ばされてしまいそうな感じがするらしい。いや、実際そんなわけないけどね!

そんな私が、魔力が高く暴走の恐れのある彼と組むなんて、とんでもないと思われているのかもしれない。

彼自身もそう思っているのか、その表情が複雑な色に染まる。

「……………いや、……………いい。」

吐き出された否定の言葉。

それに私は、ちょっとむきになった。

「どうして？それとも、他に誰かと組む予定があるの？」

「……………それは……………」

言いよどむ彼に、私は少し高圧的な態度で迫る。押しして押しして、押しきってやるわ！

「俺と組めば……………お前が……………」

「あなたは私には勝てないわよ。傷一つだって、付けられやしないわ。」

そう言い切れば、彼がちよっとムツとしたのがわかった。

ふふふ、乗ってきたわね。

「そんなわけないだろ。」

「私を見た目で判断してると、痛い目に合うわよ。」

ふふふんと鼻で笑ってやる。

そんな私の態度に、周りからも戸惑いの声が上がった。

まあ、今までは大人しい深窓の令嬢風を装ってましたからね。

「……………どうなっても、知らないからな！」

彼がそう言っつて、私を睨みつけてきた。……………実はものすごく負けず嫌いな性格だったのね。

彼の全身から魔力が立ち昇る。

そのまま魔力は炎となつて、彼の周囲を取り囲んだ。

本当に、魔法を使うのに呪文も道具も必要ないのね。

その様を間近にした先生方も驚いてるわよ。

先生方は驚きながらも、他の生徒達を私達から遠ざけた。

私にも何か言ってるけど、まあ、聞こえないふり。

彼の炎を前にしても、私は態度を変えず真つ向から彼の目を見ていた。

そんな私に戸惑いながらも、彼は私に向かって炎を放った。

彼は力を抑えたつもりかもしれないけど、制御できない炎が地面を這うように私に向かう。

真つ赤な渦巻くような炎が目の前に迫る。

全く避けようとするしない私に、周囲が　　彼が、息を飲む音が聞

こえた。

覆い被さるるように、炎が私を飲み込む瞬間、炎は私の周囲で水蒸気を上げながら一瞬で立ち消えた。

当然私は無傷。

辺りは静まり返り、水蒸気の向こうにぼかんと間抜け面をさらした彼が見えた。

くすり、と思わず笑ってしまう。

私の周りには、常に7種の精霊による防護結界が張られている。

光と闇の常設結界を中心に、5種の属性の中で、私にぶつかってくる攻撃に対して、最も効果的に対処できる属性の結界が瞬時に張られるようになっていたのだ。

今は、彼の放ったのが炎だったから、水の結界がそれを阻み打ち消したってわけね。

彼にそれを知らしめるように、一瞬だけその結界が見えるようにした。

この私の結界を打ち破れるものはいないだろう　　それこそ彼が、自分の能力を使いこなし、本気で破ろうとしてこない限りは。

呆然と私を見ている彼に向かって、次は私の番ねと微笑む。

心の中で、水の精霊に力を貸してもらおうようお願いして、「えい。」と気の向けるような掛け声をかけた。

その途端、ざばーっと盛大な音を立てて彼の頭上から大量の水が降ってきた。

その勢いたるや。ぷぷ、何かのコントみたいね。

水が治まると、そこには全身水だらけで座り込む彼の姿が。表情が未だ啞然としている。口、開いてるわよ。

そんな彼に笑いながら近づいて、彼の前に手を差し出した。

「言ったでしょ！あなたじゃ私に、傷一つだって付けられやしないってー！」

そう言って、満面の笑みを浮かべる。

傷つけることを恐れて、遠ざけようと、脅しのために攻撃をしてきたのでしょうけど。

あなたがそんな優しい人である限り、決して私には勝てないわ。

だから、私はあなたを怖がらない。傍にいるわ。

そんな私をじっと見ていた彼は、ようやくのろのろと腕を上げて、

私の手を掴んだ。

ぐっとその手を握った私に、今にも泣きだしそうな顔をする。

「私はアリアージュ！これからよろしくね！」

そう言って、立たせようと手を引っ張る。その時に、火の精霊術で彼の体を乾かした。

いや、さすがにずぶ濡れにさせたままでは風邪ひいちゃうしね。

私に手を引かれるままに、彼はゆっくりと立ち上がり。

「リュカ……………ディアス……………だ……………」

俯いたまま、そう答えた。

### 3・彼との授業。

それから、グラウンドの端のほうで二人で魔法演習を行った。

最初はハラハラと私たちを見ていた先生方も、もう好きにやってくれとばかりに、他の生徒達の指導へと回っている。

まあ、魔法で私達に指導することはないってことでもあるけど。

ちなみに、演習といっても、同学年の他の生徒達は呪文を唱えて火の玉を出したり、水を生み出したりという程度だ。

当然リュカのように、攻撃に魔法を用いたりすることなんてまだできない。

それは魔力量や、使い方を学んでないっていうこともあるけれど。

だから、12歳でこれほど魔法や精霊術を使いこなせる私達は、十分異質だった。

まあ、私に対してはまだ、人々の目は優しい。

というのも、精霊術は自然界に存在する精霊と心を通じ合わせ、その力を借りることで術を発動させる。

そして、精霊は邪悪や偽りを嫌うから、精霊と心を通わせることができるのは、心が綺麗な人間だと言われている。いや、私の

経験から言つと、彼らはその人間が自分の興味を引くか否かで決めている気がする。

火の精霊王なんか、私の魂が“面白そう”とかいう理由で力を貸してくれることになったからな。他にも、風の精霊王は“何となく”だったし。どんだけ気まぐれ。

んで、精霊との繋がりが深ければ深いほど、術のイメージが明確に伝えられ、高度な精霊術が使える。

だから、別に術を学ばなくても術が使えるってことは、精霊との繋がりが深いってことで、イコールそれだけ心が綺麗だっていうことになる。

だもんだから、精霊術師はあまり危険視されないのだ。

それに対して、魔法は自らの魔力をそのまま魔法に変換するから、自らの能力以外で特に制約はない。

だから、悪用される場合も多く、そのため強大な魔力を有する者は危険視され、周囲から怯えられやすい。

この学園の者が、私には普通に接するのに、リュカに対して怯えたり敬遠したりするのはそついった理由からだろう。

今度はリュカが氷の氷柱みたいな矢を放ってきたから、私は炎の結果でそれを防いで、彼の頭上から大きな雹の雨を降らせる。

それを何とか左右に避けたりユカは、段々むきになってきたみたいで、炎を纏わせた岩石の塊を降らせてきた。

土と炎の合体技。かなり難度の高い上級魔法ね。

私は水の結界で降ってくる火の粉を防ぎ、闇の精霊術で岩石を地面に叩き落とした。

ふふふふ、そんな強力な魔法で私に挑んできたご褒美に、私はリユカの足元に底が見えないほどの落とし穴を作ってしまった。

いきなり消えた地面に、まんまと落ちていくリユカ。

リユカなら風の魔法で飛び出てこれるだろうけど、実はその穴には闇の精霊術で魔法を発動出来ないようにしてあるのよね。

だから、自力で上がってくるしかないってわけ。さー頑張んなさい！若者よ！

漸く穴から這い上がってきたリユカが、穴の淵にしがみ付いてゼーゼーと息を吐いているとき、ちょうど授業終了のベルが鳴り響いた。

泥だらけでぼろぼろになっているリユカに、周囲から同情の目が向けられているような気がする。

どこかで、「お…鬼だ……」なんて声が聞こえた気がするけど、気にしない。

この後はちょうどお昼だったから、光の精霊術でリュカの汚れを落として、何か難しい顔をするリュカの手を引っ張って、食堂へ向かった。

私達が食堂へ入ったとき、一斉に人の目が集まり驚愕に見開かれる。

まあ、今まで接点なんかなかったものね。

そこここでひそひそと交わされる好奇、無責任な噂、根拠のない憶測、それから罵りの言葉。

それらは、私達が席をついてからも治まることはなくて、特にリュカについての否定的な言葉は、私に聞かせようとしてるんじゃないかってくらい、大きな声で聞こえてくる。

そのせいか、硬い表情のリュカ。

それらすべてに腹が立って、私は私達のテーブルの周りに、音を通さない結界を張った。

人の声を排除した空間は、しんと静まり返って、私はほっと息を吐く。

既に届いていた料理から顔を上げれば、驚いた表情を浮かべたりユカがいて。

「……………食事は静かにしたいもの。」

何となくリュカの言いたいことが分かってしまつて、先手を打つてそう告げた。

はっ！今のちょっとツンデレっぽかった！？

べっ……別に、あんたのためなんかじゃないんだからねっ！的なの？

うわーうわー！もうすでにお分かりでしょうけど、前世も今も私ツンデレとは程遠いキャラだったのよ。

……。おおおお……何か、やってしまった感じよ！……。恥ずかしい……。

そんな私の内心の悶えも知らず、リュカはゆるりと表情を崩した。

「……………ありがとう。」

照れくさそうに視線を逸らしたまま、ぼつりと零された言葉に、心臓の辺りがきゅんっとなった。

べっ……別に、可愛いだなんて思ってなんかないんだからねっ！！

#### 4・彼の喧嘩。

それから、私は何かにつけてリュカと行動するようになった。

何かもー、何かにつけてこの子可愛いのよね。照れ隠しにぶっきらぼうになるところとか、嬉しそうにそっと笑うところとか！

しかも、結構抜けてるところもあって、私の母性本能を撥る撥る。

朝会って、声をかけた時に安心したような笑顔を向けられたときなんか、場所を構わずに抱きしめて撫で練り回したくなったもの！

周りの皆も、どうしてこの可愛さに気付かないかなー！

そんなある日、私は中庭に向かって廊下を走っていた。

一応淑女だし、普段はそんなことしないんだけど、今日は仕方がないのよね。

何故なら

「止めなさい！」

中庭に着いた途端、その場を取り囲んでいる野次馬達の間を何と

かすり抜けて、一定の距離を置いて向かい合って立っていた男子生徒達の片方　　リュカに駆け寄った。

私の登場にリュカは驚いた顔をする。周囲にも、ざわざわと戸惑いの波が広がった。

このことは、同じクラスの女の子が教えてくれたのだ。

リュカと、同じクラスの男の子達が、中庭で喧嘩をしていると。

ただの喧嘩なら、私もわざわざ止めになんて来なかったわ。

でも、リュカはまだ感情的になると魔力が暴走するから、相手に怪我を負わせたなら大変なもの。

リュカだって、また後で落ち込むに決まってるわ。

だから、止めなきゃ！

私が割り込んだとき、まだ実力行使は始まってなかったようで、リュカと相手　　3人の男子生徒達　　は向かい合って何か話していたみたい。

私はリュカを背にして、相手の男の子達の方を向いた。

その相手は、確か子爵家の男の子とそれに類する家の男子生徒で、私を見てしばらく驚いていたようだったが、はっとしたように私

とリュカを見て、私の背後にいるリュカを睨みつけた。

「アリアージュさん！どうしてそんな奴と一緒にいるんですか！」

3人の男子生徒のおそらくリーダー的存在、子爵家の男の子がそう叫んだ。

……………え？どういうこと？……………私？

「そいつは孤児だし、魔力は強いかもしれないけど、その魔力も制御できない出来損ないだ！」

そうだ！そうだ！と、他の2人の生徒達も声を上げる。

背後で、リュカの体がぴくりと震えたのが分かった。

「そんな奴と一緒に居たって、アリアージュさんには何の利益にもならないでしょう！アリアージュさんにはもっと相応しい相手が

！？」

その男子生徒の物言いにいい加減腹が立って、私は彼の口から発される音を消した。

男子生徒は声を発そうと口をパクパクさせているが、それは音にはならなかった。

他の2人も、子爵家の男の子の様子に驚いて口を噤んだ。

はー……………もう、何言っちゃってんだらうね。こいつらは！

私は息を一つ吐き出して、その男子生徒達を半目で睨みつけた。

「……………そうね、私がリュカと一緒に居なければならぬ理由はないわ。」

私の言葉に、リュカは小さく息を飲み、相手の男子生徒達は嬉しそうな表情をする。

「だから、私の意志でリュカといえるんじゃない！」

相手が、は？っという顔をする。

「理由なんかなく、私がリュカと居たいからいるのよ！それを誰かに口出しされる筋合いはないわ！ましてや、リュカに文句を言うなんてもつてのほかよ！」

きっぱりと言い切った私に、相手の男子生徒達も、周囲の野次馬達も驚きを顕わにしている。

リュカ以外の前では大人しいイメージの私が、こつもきつぱりと反論したものだから驚いてるんでしょうけど、言いたいことは言うわよ！私は！

ちなみに、リュカの前以外でお淑やかでいるのは、本性を出す必要性を感じないからです！

「さ！行きましょー！」

そう言って、リュカの背を押し、その場から離れようとする。

あ、そうそう。言い忘れてたわ。

私は、もう一度男子生徒達の方へ振り返り、

「もし、またリュカを苛めたら、私が、何するか分からないわよ。」  
そう、にやりと笑ってみせた。

何だか動きの遅いリュカの背をぐいぐいと押し、近くにあった建物内の食堂の前の休息所に私達は来ていた。

「もう！あんな奴らと、いちいち喧嘩をするなんて！」

リュカと向かい合い、腰に手を当ててそう言えば、リュカは気ま  
ずそうに視線を逸らしながら。

「……………だって、あいつらが……………、俺が……………アリアに無理矢理傍に  
居させてるんじゃないかって……………、強制の魔法なんかを使って…  
……………」

へー、周りの人達にはそう思われていたのね。

私は、わざとらしく首を振って、やれやれと息を吐いた。

「この私が、リュカみたいなへたれに操られるわけないじゃない。」

「…………へたれってなんだよ！」

リュカがムツとして言い返してくる。

へたれって言葉はこの世界には無いけど、私が時々使うから、リュカもおよその意味は分かっているみたい。

「じゃあ、かけてみれば良いじゃない！強制の魔法！」

私はそう言ってリュカの目を見上げた。

リュカも眉を吊り上げたまま、私の目を見返してくる。

ざわざわと、周りのざわめきが聞こえる。

ちょうど昼食時だったので、食堂に向かう人や食堂から出てきた人達が、私達を遠回しに見ているようだった。

30秒ほど経った頃かしら、リュカの頬が徐々に赤みを増してきた。

それに私は思わず小さく笑みを浮かべてしまう。

途端、リュカは顔中を赤くして、視線を逸らした後、その場にしやがみ込んでしまった。

上から見下ろしたリュカは、髪の間から見える首筋まで真っ赤だ。

リュカは、今まで正面から自分に向かってくる人があまりいなかったから、人と目を合わせることがどうも苦手らしい。

出会って間もないときは、会話する間も視線を彷徨わせていたわ。

最近はようやく慣れてきたのか、30秒ぐらいは視線を合わせることができるようになったんだけど。

「強制の魔法をかけるには、相手の目を通して精神を支配しなければならぬのよ！」

私を支配したいのなら、3日間は睨み合う覚悟で来なさい！」

私は、びしっとリュカに指を突きつけた。

何故3日間かというのと、さすがに眠気で私の集中力が途切れるだろうと思われるからだ。

そんな私の言葉に、周りからは、「なるほど」「や」「確かに」と頷く声や、納得いかないような唸り声が聞こえてくる。

でも、まあ、これで私が無理矢理リュカと一緒に居させられているという変な噂も減るだろう。

くすりと笑って、未だしゃがみ込んだままのリュカの頭を、私はぼんぼんと叩いた。

## 5・彼と長期休暇。

学期ごとの試験も終わり、夏季の長期休暇がやってきた。

そう言えば、リュカは魔法能力は飛び抜けて優れているけど、勉強の方は苦手らしく、試験前に私はリュカにとことん叩き込んだ。

そのおかげか、リュカは欠点を取ることなく、無事夏季休暇を迎えることができそうだ。

この休暇を利用して、私は実家に帰ることにしたけど、リュカは学園に留まるらしい。

予定を聞いた私に、リュカは「俺が帰っても、迷惑になるだけだろう」とそつと笑った。

その寂しそうな笑みに、心臓を突かれて、私はリュカの頭をくしゃくしゃと掻き回したのだけれど。

一緒に居るようになってから一つの季節を超えたけど、私は未だリュカの今までの生活や現在の状況について聞いていない。

まあ、話したくなったらリュカが話してくれるだろうし、聞いたとしても私達の何が変わるわけもないと思うしね。

さて、実家に帰るには、学園から馬車に二日ほど揺られなければならぬ。

そりゃあ、精霊術を使えば、そんなに時間をかけずに瞬時に帰れるけれど、特に急ぐわけでもないのに、あまり精霊にわがまを言うのは良くないし、まあ、こうしてのんびり景色を見ながら馬車に乗るのも、たまには良いかと思うのよね。

実家に帰った日の夜に、私は両親と兄と、休暇で家に帰っていた姉とともに、夕食をとった。

ちなみに、兄はすでに学園を卒業して、次期領主として父の仕事を手伝っているし、姉は私とは違う学園に通っている。

次の日は部屋でゆっくりしたり、母や姉とお茶会をした。

その次の日は、兄に付いて私も領地を見て回った。

また次の日は、一人で街中を歩いた。

その他にも、部屋で本を読んだり、領地内の精霊に会いに行ったり、友人と遊んだりして過ごした。

けど、実家に帰って五日ほど経った頃から、学園に残してきたり

ユカのことが気になりだした。

今どうして過ごしているのだろうか。

退屈してやしないか。暴走してやしないか。……寂しい思いを、してやしないか。

その思いは段々強くなって、十日が経つ頃には私は学園へ戻ることを決意していた。

渋る家族には、学園で勉強したいことがあるからと説得して、実家に帰って十一日目の朝に私は馬車に乗り込んだ。

馬車に乗って、しばらく揺られているうちに、私はこの行動が早計だったように思えてきた。

私がいないとリュカが寂しがるなんて、とんだ自惚れだ。

リュカだって、私がいなくたって、きっとそれなりに学園で過ごしているだろうし。

ふつと息を吐いて、私は窓の外に目をやった。

まあ、それならそれで、新学期に向けての予習でもしてればいいかと、私は気持ちを切り替えた。

三メートルほどもあるうかと思われる大きな鉄格子の校門を抜け、私の乗った馬車は学園内の寮の前で止まる。

馬車の扉が外から開かれるのを待って、私は馬車を降りた。

しっかりと地面に足を下ろして顔を上げれば、寮の正面玄関の前にリュカが立っていて驚いた。

何故か泣きそうな眼と、心なしゃつれたようなその様子は、道端に捨てられた子犬のようで、無条件に手を差し伸べたくなる。

でも、一体どうしたのだろうか。

「どうしたの？リュカ？」

何も言わないリュカが心配になって、私はリュカに声をかけた。

途端、リュカの表情がくしゃりと歪む。

そして次の瞬間、私はリュカに抱き付かれていた。

私より頭半分高いリュカが、縋るように私を抱き込む。リュカの肩は揺れていた。

抱き着かれたときは驚いたけど、ただならぬリュカの様子に、私は腕をリュカの背に回し、背中をぽんぽんと叩いた。

「何かあったの？」

そう訪ねた私に、リュカはさらにぎゅっと抱きついてきて。

「アリア、アリア、アリア、アリア……………」

私の名を呼び続ける。

「……………誰かに、いじめられたの？」

私の問いに、リュカは首を振る。

「……………暴走して、先生に怒られた？」

また、首を振る。

どうしたものかと、私は、背中に回していた手をリュカの両肩において、リュカから体を離れた。

覗き込んだリュカの顔は涙でぐしゃぐしゃで、どうしたのかと心配になる。

「……………寂しかった、んだ」

宥めるように頭を撫でていると、漸くぼつりとリュカが話し出した。

「アリアが、いなかったから……………すごく寂しかった……………このまま帰ってこなかったら……………どうしようって……………」

一度は泣き止んだリュカの目に、また涙がこみ上げる。

「……………独りは…嫌だよ……………、……………こわい……………」

そう言って、また私を抱き締めた。

……………！

ど……………どうしよう……………！…？

不謹慎かもしれないけど……………この子可愛すぎる！！…！

私が帰ってくるか心配だったとか！

帰ってきたのに気づいて、飛び出してきちゃったりとか！

安心して泣いちゃったりとか！

ああ、もう！ 可愛い可愛い！ 撫で練りまくりたいいいいい！！

し……………しかし、ここはあえて空気を読んで我慢する。

「じはん、食べたの？」

リュカの背を摩りながら、問いかけた。

私が学園を出る前に見た時より、痩せたような気がするリュカが気になったからだ。

私の言葉に、リュカは私の肩口で首を振る。

「お腹空いたし、ご飯食べに行こっか」

努めて明るくそう言えば、リュカは私の肩に顔を付けたまま頷いた。

そのまま二人で食堂に行つて食事をして、それから私は、離れたがらないリュカを連れて、久しぶりの寮の部屋に戻った。

安心したからか、もしくはお腹がいっぱいになったからか、眠そうにふらふらしているリュカを、光の精霊術でふかふかにしたベッドに寝かせる。

横になったまま、私が荷物を片づけるのを見ていたリュカは、やがて眠気に負け、寝息を立て始めた。

リュカが眠つたのを確認して、私はそっとリュカに近づき、横になつている彼の上に手を翳し、光の精霊術でリュカに纏わりついていた瘴気を抜つた。

瘴気は、魔力を持つ者が、憎悪や嫉妬などの悪感情を持った時に、

それが魔力に作用して生まれる。

そして、瘴気は、そのまま生じさせた者に留まって、その者の悪感情を増幅させ、魔に落とすか、もしくは、その者から離れて一定の場所に溜まり、凝固して魔物を生み出したりする。

強大な魔力を持つ者が悪感情に支配された時、その者が生み出す瘴気の量は、他の者とは比較にならないほど多く、また濃度も濃くなる。

そして、その瘴気が世界に回り、瘴気にとり憑かれる者や魔物を、多く生み出すようになるのだ。

そう、その膨大な量の瘴気を生み出す者を、人々は魔王と呼ぶ。

魔王は、別に魔物を従えて人を害そうとするわけではなく、ただ世界を呪い、狂い、際限なく瘴気を生み出し続ける。

そして、瘴気から生まれた魔物が、人や他の生き物を本能のままに襲うため、人にとって脅威となるのだ。

リュカは魔王になりうるだけの膨大な魔力を有しているから、このまま孤独に落ち、世界に絶望すれば、再び瘴気に囚われ魔王となるだろう。

魔力によって人から忌避され、その魔力によって魔王となり、討伐の対象にされるなんて、リュカにとってその強大な魔力を持つ意味とは何なのだろうか。

それでも魔力は、魂に付属するものなので、幾度生まれ変わったとしても、魔力の量が減ることは無い。

私はそつと、横になって眠るリュカの髪を撫でた。

前の生で倒した、魔王の最後が頭を過る。

私が離れたことで、今回は僅かだったが、瘴気を生み出してしまったリュカ。

もしかしたら、リュカが魔王に堕ちるスイッチを、私は握ってしまっただのかもしれないけど。

でも、まあ、全てを受け入れる覚悟はできているし。

あの約束をし、現生でリュカに出会った時点で、私の心は決まったのだから。

私は眠るリュカに薄手の毛布を掛けて、片付けの作業へと戻った。

## 5・彼と長期休暇。(後書き)

瘴気の設定は、『華の降る丘で』と同じです。

## 6・彼女の存在 リュカ視点。

俺が孤児院に入れられたのは、5歳の時だった。

産まれた時から、魔力の暴走をしばしば起こしていたけど、5歳になったとき、家が吹き飛ぶほどの大きな魔力の暴走が起こり、父さんも母さんも、死にかけるほどの傷を負った。

そして、近所にも多くの迷惑がかかったから、父さんと母さんは俺を孤児院にやることにしたらしい。

産まれた村を出ていく時、俺を怖がり嫌う目、そして、俺がいなくなることを喜ぶ人々の顔が、頭にこびり付いて離れない。

何より、俺を育てることはもう無理だと、泣き叫ぶ父さんと母さんの声が、今でも耳に残ってる。

孤児院だって何処へだって行くよ、だから、母さん、「産まなきゃよかった」なんて、言わないで…………。

送られた孤児院でも、俺は嫌われる存在だった。

何度も魔力の暴走で孤児院の建物を壊したり、ちよつと感情が高まれば魔法を発動してしまい、他の子や孤児院の先生たちを傷つけた。

やがて、俺に近づくと子はいなくなり、みんな遠くから俺を見るだけになった。

その子たちや先生の俺を見る目は、あの村の人たちと同じ、怖いや嫌いというものだった。

そして、そんな中でも、俺に優しくしてくれていた先生に、魔力の暴走で大怪我を負わせたとき、院長先生が、俺に魔術学園に行くように言った。

それはもう決まっていたことで、俺はただ頷くだけだった。

その時の院長先生の顔は、心からほっとしたというもので、俺はその後すぐに院を追い出された。

迎えの人がいたから、無事学園には着けたけど、入った学園でも、俺は遠くから見られるだけだった。

俺が孤児であることとか、魔法で色んな人を傷つけたことが、色んな所で噂されて、俺はよけいに人に避けられるようになった。

やっぱり、俺はここでも独りぼっちなのかと、心が痛くなった。

今まで俺の近くで目を見て話してくれる人もいなかったし、何より、人の俺を見る目や、顔が怖くて、人と目を合わせるということもできなくなっていた。

どれだけ魔力があったって、俺は独りで。

この学園で、色んなことを勉強したって、どうせずっと独りなのだ、悲しくて怖くて仕方がなかった。

そんな時、アリアに出会った。

アリアは、貴族のお嬢さまで、ふわふわとした柔らかい黒い髪に、きれいな藍色の目の、小さくてかわいい女の子だった。

でも、7種の精霊術を使えて、頭もよくて、みんなに優しいから、たくさんの人に好かれていた。

そんなアリアが、俺に声をかけてきたとき、お嬢さまの気まぐれだろうと思った。

だけど、俺を構おうとするアリアに腹が立って、近づくなという意味を込めて、火の魔法を使った。

その火は、俺が思っていたよりも大きく速くて、俺はアリアに怪我を負わせてしまうと、とても怖くなった。

なのにアリアは避けようとしなくて、俺の火を一瞬で消してしまった。

その時、アリアの周りを囲む精霊術が見えて、そのきれいさに驚いた。

その後、上から大量の水が降ってきたときにも、とても驚いたけど。

怖い夢を見て、俺は夜中に目が覚めた。

昔よく見ていた夢は、俺を怖がったり憎んだりする人の目が、ただ俺に向けられているものだったり、俺に背を向けてどこかに行ってしまう、傷だらけの父さんと母さんだったり、というものだったけど。

最近よく見るのは、アリアが俺をおいてどこかへ行ってしまう、という夢だった。

「もう一緒にいられないの」と言って、真っ暗な中に消えてしまふアリアに、俺は必死で手を伸ばすのに、体はどうしても動かなくて、のどが痛くなるくらいアリアを呼ぶのに、アリアはどこにもいなくて。

アリアの名前を呼びながら目が覚める、そんなことが多くなった。

その夜は、寒期が近づいているせいかな、とても寒くて、部屋も真っ暗で、すごく怖くて。

どうしても我慢ができなくなって、俺はベッドを降りると、魔法を使った。

すると、ゆがんだ空間の向こうに、アリアの部屋が見えて、俺はそのゆがみを通り抜けた。

途中なにか変な感じがしたけど、気にせずにアリアの部屋へと入る。

すると、アリアはベッドの上に体を起こして、こちらを見ていて、起きていたのかとぎくりとした。

アリアはとても眠たそうで、目がいつもの半分になっていて、怒っているようだった。

「ちょっと、リュカ。夜中に女性の部屋に無断で入るなんて、通報されても文句は言えないわよ」

淡々というアリアの声に、怒っているのが伝わってきて、アリアに嫌われてしまうと、とても怖くなった。

「……ごめん……、でも、寒くて……眠れ……なくて……」

嫌いにならないでと、泣きそうになりながら、うつむいてそう言うのと、アリアが溜息を吐くのが聞こえた。

もう一度謝って、部屋に戻ろうと顔を上げると、アリアはまだ自分の目のままで、自分の掛布団を持ち上げた。

「ほら、早く入んなさい」

そう言うアリアの声はいつも通りで、怒っている風ではなくて、

俺はしばらくぼーっとアリアを見ていたけど、アリアが「早く」と言うので、おずおずとアリアのベッドに近づいた。

アリアが壁の方に寄って空けてくれた場所に横になると、アリアが俺の頭をぎゅっと抱きしめたので、驚いた。

「変なことしたら、即座に叩き出すからね」

そう言いながらも、アリアはその小さい手で、俺の頭を撫で、背中をぽんぽんと叩いた。

最初はどうしたらいいか分からなくて、体が力チ力チになってたけど、アリアの手のリズムが心地よくて、顔に感じるアリアの体温が温かくて、柔らかくて、泣きそうになって、俺はアリアの体に手を回してぎゅっと抱きしめた。

アリアからは気持ちよさそうな寝息が聞こえていて、アリアはもう眠ってしまっているみたいだった。

アリア、アリア、アリア、アリア、アリア、アリア……………

小さくて細い体を抱き締めながら、俺はただ、ずっと心の中でアリアの名前を呼んだ。

アリアと初めて話してから、アリアはずっと俺といてくれるようになった。

アリアは強くて、俺が魔法で攻撃しても、魔力が暴走しかけても、

傷一つ負わなくて、いつもふわふわと笑って、俺の傍にいてくれた。それがとても嬉しくて、いつだって心がぎゅっと誰かにつかまれているみたいに痛くなって。

アリアは知らないんだ。

俺が毎朝、アリアに会うまで不安で不安で仕方がないってこと。

俺と会ったとき、アリアが笑ってくれるか、あの嫌な目を向けられないか、アリアの顔を見るのに、すごく勇気を出してるってこと。

小さくて柔らかくて、力を込めてしまえば壊れてしまいそうなアリアにさわるとき、手が震えるのを必死に押さえつけてるってこと。

アリアが笑ってくれるたびに、胸に何かがつまったように苦しくなって、泣きそうになるってこと。

俺が、もうアリアなしじゃあ、生きていけなくなってるってことを。

アリアが俺から離れていってしまったら、俺はもうきつと独りには耐えられなくて、壊れてしまうんだと思う。

だから、アリア、アリア、どうかずっと俺の傍にいてよ。

アリアが、どうして俺と一緒にいてくれるのかは知らない。同情

かもしれないし、ただの気まぐれかもしれない。いつか誰かが言っ  
てみたいに、利用……しようとしているのかもしれない。

でも、それでもいいから。

誰か、誰も、俺からアリアを取らないで。

もし神さまが本当にいるのなら、ずっとお祈りし続けるから。

どうかずっと、アリアといわせて下さい。

アリアの傍はいつでも暖かくて、花のような優しい匂いがしてい  
て、とても心地がよかった。

傍に聞こえるアリアのゆったりとした寝息に、とても安心して、  
俺もいつの間にか寝てしまっていた。

次の日の朝、俺の頭を撫でながら「……ポンタ……」と呟いたアリ  
アに、それは誰なの！？ って、俺はとても怖くなったけど。

アリアが、

「あ、ごめん、昔うちで飼っていた犬と間違えたわ」

って、目を擦りながら言っから、ほっとはしたけど。

でも、俺は何だかとても傷ついたよ。

## 7・私と求婚

「アリアージュ嬢。どうか私と結婚してほしい」

朝、次の授業が行われる教室に向かう途中の廊下で、いきなり赤い長い髪の上級生に跪かれたかと思うと、妙に格好つけたポーズで言われた言葉に、私はぽかーんと間抜けな顔をさらしてしまった。

またそれが、この学園、しいては国内でも、知らない者はいないほどの有名人だったものだから、気が付けば周りは私と同じように驚愕の表情を浮かべた生徒達で囲まれていた。

そして、そこにいる生徒達が、羨望と嫉妬を孕んだ目をして、固唾を飲んで私の返事を待っているようだったから、つい淑女らしくない引きつった笑みを浮かべてしまったとしても、仕方がなかったと思う。

その日の午後、教室で学課の授業を受けていた時、遠くの方からドゴオオオオオ！　と何かが発する音と、人の悲鳴や騒ぎ声が聞こえてきて、何事かと顔を上げ、隣の女の子達と顔を見合わせた。

そうしているうちに、バタバタと廊下を走る足音がして、わあ、何だか嫌な予感がする、と私は手に持っていた筆記具を机の上に置いた。

「アリアージュさん!!」

勢いよく扉が開いたかと思うと、そこから同じクラスの男の子が、血相を変えて飛び込んできた。

あ、実は、月日の経つのは早いもので、私とリュカは学年が上がったんだけど、またクラスは同じになったのよね。

でも、科目選択の都合から、今の時間はリュカはグラウンドで実技の授業で、私は学課の授業中だったのよ。

やっぱり、成長するにつけ、私達もずっと一緒にいるわけにはいかないしね。

リュカも、最近は魔力をちゃんと制御できるようになってきたし、ちよつとずつだけでも交友も広がって来たみたいだから、いい傾向かなあって思ってたんだけど。

「リュ、リュカくんが!」

そのクラスメイトの声で、教室がざわめき出す。

とりあえず、どうしたものかと教壇を見れば、先生も困ったように頷いていて、私も苦笑いをして席を立った。

そして、扉の所の男子生徒に話を聞けば、どうやらリュカがグラウンドで魔力を暴走させているとのこと。

学年が上がってから、リュカが魔力を暴走させることなんてなかったから、何があったのかと首を傾げながら、私はグラウンドへと急いだ。

校舎から離れた、広大な面積のグラウンドの一角に人が集まっているのを見て、そちらに近づいていくと、私に気付いた生徒達がゆっくりと通り道を作ってくれる。

複雑な表情で見られるのを何だか居心地が悪く思いながら、人垣が途切れる辺りに来ると、その向こうで、真っ赤な炎に包まれメートルほど浮かんでいるリュカが目に入った。

そのリュカの目の前の地面は、半径五メートルほどの範囲が隕石でも落下したかのように抉られ、土が焦げてシュウシュウと煙が上がっている。

宙に浮いているリュカの目は、何も映していないように濁っていて、ゴウゴウと燃え盛る紅蓮の炎がリュカの髪を揺らしていた。

あー、もう、一体何があったのかと、米神の辺りを押さえた。

まあ、とりあえず、正気を失っているようなリュカの目を覚ませないかね。

そう思って、心の中で水の精霊にお願いして、指を上から下へと振った。

途端に、リュカの上空に水の塊が生まれ、それが一斉にリュカへと降り注ぐ。

今回は、リュカと初めて会ったときみたいな、少しの量じゃなくて、滝に打たれる修行僧かっというぐらいの重さと水量をプレゼントしました。

たっぷり頭を冷やしてもらうためにね！

ついでに、流れ落ちた水で、地面に僅かに燻っていた火も消えて、一石二鳥ってやつよね。

そう思いながら、容赦なくドババババと、リュカの姿が見えなくなるほどに水を降らせていると、周囲から、「あの……そろそろ……」とか、「さすがに、もう良いと思うんだけど……」という控えめな声が聞こえてくる。

確かにこれ以上は水浸しになっちゃうわね、と水を止めると、そこにはずぶ濡れで地面に座り込んだリュカがいた。

すたすたと近づいてリュカの前にしゃがみ込めば、リュカは濡れて顔にかかる髪の毛の向こうから、ぱちぱちと目を瞬かせている。

「正気に戻った？ リュカ」

ちよっと怒りを滲ませながら笑ってそう言っていると、リュカはきよるきよると周りに目をやってから、気まずそうに私を見上げてきた。

「……アリア……」

そう私の名をぼつりと口にして、リュカは俯いてしまう。

私からその表情は見えなくなってしまったけど、いつもとは違うリュカの様子に、私は首を傾げた。

最近、リュカも魔力の制御はちゃんどできるようになっていたから、今回の暴走は激しい感情の揺れによるものかしら。

うーん、だったらまた誰かに何かを言われたとか……？

しばらくじっとリュカを見下ろしていたけど、リュカは相変わらず顔を下に向けたままで、一向に私を見ようとはしなかった。

とりあえず、リュカもびしょ濡れだし、このままここに置いておくのは良くないだろうと、私は腰を上げて、先ほどからずっと様子を窺っている先生の方に顔を向けた。

「先生、彼はちょっと調子が悪いみたいなので、救護室に連れて行きますね」

私がそう言えば、先生は、「ああ、頼む」とあっさりと了承をくれた。

リュカに手を焼きつつも、見捨てないでいてくれる良い先生なんだけど、さすがに今回はどうしたらいいか分からなかったみたいね。

私は先生に笑顔でうなずいて、リュカの腕をとって引っ張った。

もし立ち上がらなかつたら、闇の精霊術で重力操って浮かせようかとも思っただけど、リュカは素直に立ち上がった。顔はまだ俯いたままだったけど。

そうして、そこから歩き出そうとしたとき、グラウンドの大穴がそのままだったことに気が付いた。

そこで、リュカの腕を掴んだまま、大穴のあるグラウンドの方を振り返り、

「土の精霊達。後はお願いね」

そう言えば、周囲に飛び散っていた土がゆっくりと動き出し、穴の中に戻って行く。そして、大穴の中の土も徐々に動き出したかと思つと、穴は徐々に塞がっていった。

リュカに降らせた水も綺麗に土に染み込んで行つたし、焦げ跡も綺麗に直っている。

うん、さすが精霊さん達、良い仕事するわ。

そうにつこり笑って心の中で礼を言い、私は踵を返して、リュカを引っ張りながらその場を後にした。

周りに集まっていた生徒達の中の二人が、何故か顔を真っ青にし

ていたのを、不思議に思いながら。

二人とも無言のまま、救護室にたどり着いて、扉を開ければ、どうやら救護の先生は不在のようだった。

とりあえず室内に入り、入り口の辺りで、火の精霊術でリュカを乾かしてから、リュカをその辺りにあった椅子に座らせた。そのままリュカの前に立って、私はリュカに問いかけた。

「何かあったの？ リュカ」

そう私が声をかけると、今まで頑なに俯いていたリュカは、そつと顔を上げて私を見上げてきた。

そして、目をうるうるとうろた彷徨わせた後、唇をぎゅっと噛んで、漸く口を開いた。

「……アリア、……結婚……するの……？」

「はあ？」

あ、いかん、驚きのあまり変な声が出てしまった。ワタクシったら、ほほほほほ。じゃなくて。

「えと、どういふこと？」

首を傾げた私に、リュカは辛そうにぎゅつと顔を眇め。

「だって！ ……王子……に、求婚……されたって……」

言葉を詰まらせながら、リュカはまた顔を俯かせた。  
その体は小刻みに震えていて、また魔力が揺らぎ出す。

ああ、なるほど、朝の出来事を聞いて、衝撃で魔力が暴走したの  
ね。

そう、朝私に結婚を申し込んできたのは、この国の第二王子様だ  
つたのです〜！

いやー、あれはさすがに私も驚いたわ。なんたって、私、王子様  
と接触したことも話したことも無かったからね。一体どういつつも  
りで王子があんなことを言ってきたのか……。

まあ、思い当たるとしたら、私のこの力かしら。七種の精霊術を  
使える者を、国に縛り付けておくため、もしくは、精霊の加護を受  
けた子どもを作るため、ってところかしらね。

しかし、国のために見知らぬ相手を妻にしなきゃならないなんて、  
やっぱり王族って大変ね、なんて他人事のように考えてしまう。

私が口を噤んだのを不安に思ったのか、リュカが恐る恐る顔を上  
げる。

その顔は昏く絶望を孕んでいて、私は小さく笑って、リュカの頭  
を撫でた。

すると、がばっと立ち上がったリュカが、ぎゅっと私を抱き締め  
てくる。

まったく、この子は。普通、女性を断りも無く抱き締めたら、痴  
漢だ変態だって、殴り飛ばされて警備兵に突き出されるわよ。今度、  
ちゃんとその辺も教えておかないと！

そう思いながら、以前よりも背が伸びたリュカの肩口に頭を寄せ、宥めるように背中を撫でた。

「……嫌だよ、アリア、嫌だ……！ アリアが、誰かのものになるなんて……！ アリアと……一緒にいられなくなるなんて……絶対に、嫌だ……！！」

嗚咽を漏らしながら、リュカがただ嫌だ嫌だと訴える。

ああ、もう、本当に、どうしようもなく可愛いんだから……！

何か、ぺたりと下がった耳と、キューンキューンって鳴き声まで聞こえてくる。こうなると、ぐりぐりとひたすら撫でまわしながら、落ち着くまで慰めたくなるのよね。犬好きとしては！

そんなことを考えていると、リュカがバツと顔を上げ、じっと私を見ながら。

「……ねえ、アリア、王家がなくなれば、アリアは結婚しなくてすむ？」

私の目を覗き込むように見てきたリュカは、表情はやけに真剣なのに、その目はどこかぼんやりと昏くて、一歩間違えれば深淵に落ちて行ってしまいそうだった。

傍から見れば、かなり怖いことを言われているような気がするし、もし私がここで頷けば、本当に王宮に向かって行きそうなんだけど、でも、私には何だかリュカが必死で踏ん張っているように見えて、困ったように笑ってしまった。

「馬鹿ね。そんなことしたら、あんたは世界中から追われることになって、余計に一緒にいられなくなるわよ」

真つ直ぐに私を見ってくるリュカの額を、掌でぺちと叩いた。  
そんな私の言葉に、リュカはまったくしゃりと顔を歪めて、途方に  
暮れたような顔をする。

リュカの額を叩いた手を、そのままリュカの頭に置いて、その見  
た目より柔らかい髪を撫でる。

「しないわよ」

「……え？」

「王子と結婚なんて、しないって言ったの」

にっこりと笑ってそう言えば、リュカはぽかんと驚いた顔をした  
けど、その後また顔を眇めて。

「……そんなこと、……だって、断れない……んでしょ？」

ぽつりと漏れた言葉に、私はおやと目を瞬かせた。

その辺りの事情を、リュカが知っているとは思わなかった。もし  
かしたら、私と王子の噂をリュカに教えた誰かに、聞いたのかもし  
れない。

そうね、確かに私の家は、貴族とはいえ伯爵位で、王家との結婚  
なんてこの上ない僥倖、まさにシンデレラストーリーってやつなん  
でしょう。そして、そんな身分が下の者が、王子の求婚を断るなん  
て、下手したら王家の怒りに触れて、領地没収、家のとり潰し、一  
家も路頭に迷う、なんてことになりかねないのよね。

だから、普通なら断らないし、断ることなんてありえないのよ。

まあ、王子に求婚されて、断ろうなんて人もそうそういないんだろ  
うけど。

でも、私も貴族の娘だけど、日本に住んでいた記憶があるから、  
やっぱり結婚は好きな人としたいし。

そんなことを考えながら、私の肩に顔を埋めて、ぐずぐずと泣き  
ながら、放すもんかってくらいにぎゅっと抱きしめてくるリュカに  
目を移す。

それに、リュカが私から離れるならまだしも、私からリュカの傍  
を離れる気なんてさらさら無いしね。何より、私が王家に嫁に行く  
ことになったら、本当に王家を滅ぼしに行きかねないし。

くすりと小さく笑って、肩に乗せてあるリュカの頭に、そつと頬  
を寄せた。

というわけで、まあ、何とか波風立てずに無かったことにできる  
よう、交渉してみますか。

そんな決意を胸に、リュカの胸を押して、少し体を離させた。

そして、涙でぐしゃぐしゃなリュカの顔に少し笑って、その額に  
ちよんと口付ける。

私の行動に、リュカは驚いて目を見開いた。その拍子に、綺麗な  
金色の目からぼろりと涙が零れ落ちる。

「ちゃんと、断ってみせるわよ」

リュカと額を合わせて、その目を覗き込みながら、勝気に笑って

みせる。すると、リュカは涙が止まった目で、しきりにぱちぱちと瞬きをしていた。

そして、その潤んだ目でじっと私を見つめる。信じたいのに信じきれない、そんな迷いが浮かんで見えた。

「ただし、もし断れなかつたら、この国から逃げるから、その時はリュカも付いて来るのよ！」

リュカの鼻先に指を突きつけながら、笑ってそう言えば、リュカは驚きに目を瞠って、やがてこくこくと何度も頷きながら、また私を抱き締める。

ぎゅーっと背中を絞めつけてくる腕に、そろそろ力加減を覚えてもらわなければと思いつつも、私はリュカが落ち着くまで、背中与頭を撫で続けたのだった。

## 8・私と王族。

うちの屋敷とは比べものにならないほどの大きな建物の、今どこを歩いているのかさっぱり分からない入り組んだ廊下を長いこと歩いて、ようやくたどり着いた部屋の前、ここまで案内してくれた侍女さんに促されて、ゆっくりと開かれていく扉の前に立った。

「やあ、ようこそ」

扉の前までわざわざ足を運んで下さり、にっこりと神々しいまでの笑顔でそう仰ったのは、この国の第一王子様。

いや、初めてお会いするけど、すごく紳士的。笑顔がとてもキラキラしてて、何だか眩しいわ。

天井から床まである大きな窓から明るい日差しの差し込む、二十畳くらいの広さの部屋。その窓際辺りに、純白のテーブルクロスのかけられたテーブルと、背に細やかな装飾のなされた豪華な椅子が三脚置いてある。

その一つは、今立ち上がってこっちに来ている第一王子のものだろう。そして、もう一つの椅子に腰を掛け、こちらを見てゆったりと微笑んでいるのは。

「本日は、このような場を設けて頂き、恐悦至極に存じます」

そんな感じの形式ばった挨拶をして、私が持っている中でも一番上質なドレスのスカートの端を持ち、淑女の礼をする。

「いやいや、そう畏まらずともよい」

そう朗らかに笑ったのは、御年四十代のナイスミドル、国王陛下だ。

王様らしい貫禄と、まだまだ衰えない精悍な顔立ちをお持ちの、かなりの美丈夫であらせられます。いや、とても第一王子第二王子合わせて五人の子持ちとは思えない若々しさをを感じるわ。

私を席までエスコートして下さった第一王子も、これまた長身で引き締まった体つきの、きりりと目元の凛々しい、爽やか美形さんね。

その仕草とかはやっぱり気品にあふれていて、まさに理想の王子様って感じかしら。

ああ、私ものすごく居心地の悪さを感じるんだけど。

今日、私は、お父様に無理をお願いして、国王陛下と第一王子殿下と話をする機会を設けてもらったのよ。

その内容はもちろん、第二王子殿下の求婚の件ね。

日本に住んでた私の感覚だと、本人に直接お断りをすればいい気がするんだけど、私のような身分が下の者が王子の求婚を断るなんて、王子の名誉を傷つけてしまうことになるのよね。

だから、この場合王子から取り消してもらえば、まあまだそんなに大事になっていない今の時点だったら、ひっそりと無かったことに出来るんじゃないかと思うのよ。一応お父様にも相談したら、すごく複雑そうな顔をしながらも、「それが良いだろう」って言うて下さったしね。

なので、王子が私に結婚を求める理由が、王家に関することならば、王様や兄王子から説得してもらった方がいいんじゃないかと思っ、て、こんな方法をとったわけ。

はー、しかし、うまくお二人を説得できるか、不安なんだけど。

でも、そんな時には、ふと、継るようなリユカの顔が頭に浮かぶのよね。しおしおと垂れ下がった耳としっぽ付きの。

やれやれ、仕方がない。頑張りますか。

そう、決意も新たに、私はこっそりと笑みを浮かべた。

勧められて用意されていた席に腰かけ、しばらく他愛のない話をしていたんだけど、ちょうど話が途切れたところで、私は表情を引き締めた。

そんな私の変化に気付いたのか、陛下も王子も真剣な顔になる。

私は、膝の上に置いていた両手をぎゅっと握り締めてから。

「この度、陛下と殿下の貴重なお時間を頂きましたのは、第二王子殿下のご相談したいことがございまして」

そう私が言えば、お二人はすでに知っていたのだろう、こくりと頷いた。

「不敬を承知で言わせて頂きますと、私は第二王子殿下とは結婚することはできません」

陛下と第一王子の顔を見ながら、はつきりとそう口にした。

陛下も第一王子も特に驚いたふうではなかったけれど、「理由を聞いてもよいか」と尋ねてきた。

しかし、その問いかけに、私は即座に答えられなかった。

いや、確実に断る理由は聞かれるだろうとは思ったけど、でも、良い答えが浮かばなかったのよ。前世の国の習慣で、結婚は好きな人になりたいと思うからです、なんて答えられるわけないしね。

「好いた人でもいらっしやるのですか？」

どう答えようか考えながら、目を伏せて俯いていると、第一王子がそう問いかけてくる。

目を上げると、柔らかな目をしている殿下と目があって、少し体から力が抜けた。

うーん、好きな人啊。この質問も少し困るのよね。

その感情に一番近いのは、今のところリュカだと思うんだけど、でも恋愛感情とはちょっと違う気がするのよ。

前世での約束を守りたいって気持ちも確かにあるんだけど、今はもう全力で庇護欲なのよね。私の精神が余計に歳食ってるっていうのもあると思うんだけど、子どもというか子犬というか雛鳥というか、そんなリュカを守ってやんなきゃっていう、まあ母性本能かしら。

たぶん、リュカ自身も、私に恋愛感情なんて持ってないんじゃないかな。いだろうか。刷り込みとか依存とか、そんな感じじゃないかなと思うのよ。

そんなわけで、私の内心では、“好きな人”と聞かれて思い当たる人はいなかったから、下手に嘘を吐くと後から余計面倒なことになるかもしれないと思って、正直に「それは……いませんけど」と答えた。

でも。

「けれど、大切な人がいるんです。すごく寂しがり屋で、不器用な人です。私は、彼が望む限り傍にいてあげたいと思っています」

ですから、第二王子殿下と結婚することはできません。と、真っ

直ぐに陛下の目を見て、ありのままの思いを素直に口にした。

「それは、やはりリュカ・ディアスという少年かね」

そんな私に、陛下がそう問いかける。

いきなりリュカの名が出てちよつと驚いたけど、まあ、得体の知れない者を第二王子の妻にするわけにはいかないから、身辺状況とか事前に色々調べたんだろつなどは思ってたわよ。それで、私が自主的に一緒にいる異性って言ったら、リュカが浮かび上がるのも当然よね。

「……はい」

ちよつと戸惑いながらも、私は頷いた。

「それでも、我々が君に王子と結婚するよう命じたら、君はどうするかね？」

真剣な顔でかけられた問いに、内心でぴんと緊張感が走った。けれど、その答えはもう決まっている。

「その時は、リュカと共にこの国を出るつもりです」

私がそう答えたとき、陛下の表情は変わらなかつたけど、目の端に映った第一王子の顔が強張った気がした。

そんな私の答えに、陛下はやっぱりと威圧感を漂わせながら。

「君の家族が、どうなるか分からないと言ってても？」

低く威厳に満ちた声に、気圧されつつも内心は妙に冷静で、私にはっこりと笑って見せた。

「もし家族に何かあれば、私は精霊を連れてこの国を去るでしょう」  
あえて冗談めかしてそう答える。その私の言葉に、分かり辛かったけど、陛下が僅かに顔を引きつらせた。

精霊を連れてこの国を去る、それが最大級の切り札になることを、私は良く分かっていた。それが相手が王族であっても。

何故なら、精霊はこの世界の至る所に宿り、世界の調整及び自浄作用も司っている。

だから、精霊がいなくなると木が枯れたり、土地が枯れ作物が実らなくなったり、豪雨や干ばつなど天候も不安定になりやすい。また水や空気が汚れ、人々が発する瘴気が溢れて魔物が増えるなど、国にとっては危機的状態に陥るのよね。

我ながら、ものすごいえげつないことを言っている自覚はあるけど、まあこれも小娘なりの懸命な駆け引きってことで。

実際は私が、この国を出るから付いて来てって言っても、精霊達が了承してくれるかは分かんないのよね。言ってみたことないし。

どうする？ これ、どうなっちゃうの！？ な心境に苛まれながら、それでも余裕に見えるような笑顔で頑張っていると、やがて陛下がふうと息を吐いて、椅子の背もたれに深くもたれ掛った。

ぱちぱちと目を瞬かせながら、第一王子を見れば、こちらは何やら苦笑いを浮かべていた。

椅子に深く腰掛けて脱力していた陛下が、やがて姿勢を正し、も

うすつきり冷めているだろうお茶を一口飲んでから、再び私に顔を向けた。その顔に浮かんでいたのは、第一王子とよく似た苦笑いの表情で。

「そこまで言われてしまえば、無理強いはできまい。王子には我々から諦めるように言っておこう」

そう言った陛下に、私はいつの間にか力が入っていた体から、ふっと力を抜いて。

「ありがとうございます」

と笑みを浮かべた。

あー、すごく緊張した。まあ、今の陛下と第一王子の様子を見る限りでは、私の家族云々のくだりは、私の覚悟を試すための問いだったんだろうけど。

でも威圧感のある美形のオジサマと正面から見つめ合っなんて、かなり精神的に摩耗したわ。気を抜くと理由もなしに謝っちゃいそうになるのよね。本当に美形って怖い！

ちょうどその時、部屋の扉をノックする音が聞こえ、陛下が答えると、僅かに扉が開かれ、上質な文官服を着た年配の男性が「陛下、お時間です」と小さく声をかけた。

次の仕事があるのだろうと、「おお、もうそんな時間か」と立ち上がった陛下と、第一王子に続いて、私も席を立った。

次の予定の邪魔をしないと思い、時間を取って下さったことへの礼と、無礼なことを言ったことへの謝罪をして、私が部屋

を出ようとしたとき、後ろから陛下の声がして、足を止め振り返った。

「私は、リュカ・ディアスの魔法の才能を潰すことを勿体無いと思つておる。そして、彼の力を他国へと持つて行かれるのも、恐ろしいと思う。そこで、彼には学園の卒業後、我が国軍に入つてもらおうと思つておるのだが……」

テーブルの傍に立ち、じつと私を見たまま真剣にそう口にする陛下に、私も体をそちらに向けて黙つて続きを待った。

「彼の魔力量から考えるに、もし彼が暴走したとき、我が軍にはそれを止められる者はおるまい。そして、そうなれば我が軍、ひいては国自体が壊滅的な打撃を受けることにもなりかねない。私はそれを懸念しているのだ」

その何かを押し量るような陛下の言葉に、私はふつと口元を緩めて笑った。

「もし、リュカが暴走し、自我を失つたときは、私が彼を殺します」

自惚れではなく、きつとこの世界でリュカを止めることができるのは私だけだろう。そして、それが彼との約束であり、また彼と共にいる私の覚悟でもある。

その私の言葉と表情に、陛下は目を瞠り、傍にいた第一王子と文官の人からも、息を飲む心配がした。

私が笑顔の向こうに決意を込めた眼差しでじつと陛下を見ていると、やがて陛下も「良く分かった」と穏やかな笑顔で返してくれた。

そんな陛下に深く礼をして、私は今度こそ部屋を後にした。

私が部屋を出るときに、胸に手を当てて礼をしてくれた文官の人にも小さく礼をして、やっぱり紳士的にも扉を開けて押さえていてくれた第一王子にも礼をする。

扉を潜って部屋を出て、もう一度第一王子を振り返り、礼を言うとしたとき、第一王子は複雑そうな顔で小さく微笑んで。

「こればかりはどうしようもないのだが、ずっと君に恋心を抱いていた弟が悲しむな」

と、そっと呟かれた。

## 9・彼の闘い。 前編

あれ？ もしかして、私って本当に第二王子に好かれてた？

第一王子の言葉を反芻しながら、私は城を後にし、城に行く前にドレスを着つけてくれた仕立屋に寄っていた。

いや、一応社交界用のドレスの何着かは、実家から寮の部屋に持って来てはいるんだけど、あんなドレス一人じゃ絶対着つけられないからね。あっち結んで、こっち盛つてと、何かと大変なのよ。

そのまま、仕立屋で普段着に着替え、着ていたドレスはまた後日取りに来ることにして、私は学園に戻るため、街の通りを歩いていた。

結局、学園内では、人の目があるから、第二王子とは話す機会が無かったし、王子の本心を聞くことは出来なかったのよね。私も、てつきり王家のためだろうと思っ込んでたし。

第二王子の気持ちについて、第一王子が嘘を言ってる可能性も無きにしても非ずなんだけど、でも、あそこで嘘を言う理由もないような気もするし、その言い方から、私に言ったというよりは、独りごちただけっていう感じだったしね。

どういう経緯で私に好意を持ってくれたのか全然分からないけど、仮に第二王子が本当に私を好いていてくれたんだったら、やっぱり一度は直接話してみるべきだったかもしれないわ。

まあ、好かれていたからといって、王子への返事が変わるわけではないんだけど。

それでも何となく申し訳ない気持ちで、学園へ帰っていると、校門のところに入影が見えた。

その子は、私とリュカと同じクラスの女の子で、実は以前、リュカと三人の男子生徒達との喧嘩のことを知らせてくれた子でもあるの。商家の娘さんで、おっとりとした優しく可愛らしい女の子なのよ。

慌てた様子の子から聞かされた話に、私は急いで校舎の方へ走り出した。

何でも、リュカが第二王子に決闘を申し込んだらしいの。

この学園内には決闘場があつて、学園内での生徒同士の私闘を禁じる代わりに、問題が起きたときに当人同士で決着をつけたければ、先生等の立会人を挿んで、決闘をすることができる。

それから、内容は当人同士が話し合つて決めることができるの。つまり、魔法で戦うか、剣を使うか、他に条件を付けるか、等ね。

さっきの子から聞いた限りでは、決闘の内容は、剣のみ使用可で、魔法は使わないことにしたらしい。

リュカがうつかり威力を間違えて、王子に重傷を負わせないように、ということなのだとか。

そんな配慮が出来るなんて、リュカも成長したのね、なんて喜んでいる場合ではないのよね。だって、リュカが剣を習い始めたのは今学年になってからだもの。それに比べて、王子は二つも学年が上だから、剣の腕では明らかにリュカが不利なのよ。

じゃあ、なんでリュカがそんな決闘を申し込んだかというところ……

……。

息を乱しながら、野球場のようなすり鉢状の形をしている決闘場の、観客席の入り口をくぐり、戦いが行われるグラウンドに接する場所まで駆け下りた。

この決闘を観戦している生徒達は思ったより多くて、私のことを知っているらしい人達が、私の方を見てひそひそ何か話していたけど、私の目はグラウンドに立つ二人の姿に釘付けだった。

戦いはすでに始まってしばらく経つようで、二人は向き合って剣を構え、互いに肩を上下させ荒く息を吐いていた。

同じタイミングで地面を蹴った二人が、ガギンと鈍い音を立てて剣を合わせるのを、私ははらはらした気持ちで見守っていた。

決闘で使用される剣の刃は潰されていて切れないとはいえ、剣で打たればかなり痛いし、怪我だってする。

リュカはどうか王子の剣を受けているようだったけど、やはり腕の腕にだいぶ差があるようで、しかも、リュカの方が体格も小さく力も弱いから、何度か剣を弾かれたり、攻撃をかわされたりしている。そして、そこに出来た隙に、剣を打ち込まれたりして、痛みを響める姿なんて、見ていられなかった。

足元も危ういし、空いている方の手で肩の辺りを押さえているみたいだから、もうリュカの体はボロボロなのだろう。けれど、必死に足を踏ん張って立っている姿に、私は心配で胸が押し潰されそうで、ぐつと歯を噛み締めた。

もちろん、リュカと戦っている相手である王子を責めるつもりはない。

この決闘に関しては、手加減は無用だし、むしろ手加減をした方が相手を馬鹿にしていることになるから、全力で戦ってくれている

王子には、逆に感謝をすべきなんだろう。でも。

観戦している生徒達から、わっという歓声や、悲鳴が上がる。リュカの打ち込んだ剣がまたかわされて、腕を打ちつけられたのだ。それでも、リュカは持っていた剣を辛うじて手放さず、とつさに後ろに体を引いて、次の王子の攻撃を避けた。

決闘の勝利条件は、相手を気絶させるなどして戦闘不能に陥らせただけの場合や、相手に参ったと言わせた場合。もしくは、戦いの継続は無理だと立会人が判断して、戦いを止めに入った場合だ。

特に、この決闘では、リュカと王子には二つの学年の差があるから、状況を考えて、リュカが剣を手放したり、膝を付く様な事があれば、立会人は止めに入る可能性が高い。

リュカにもそれが分かってるのだろう。撃たれて痺れかけている手で必死に剣を持ち、震える足に力を入れようとしている。

そんなリュカの姿に、私は心臓を何かに掴み絞められているかのように、苦しくて仕方がなかった。

本当は、もう止めてほしい。

負けでもいいから、これ以上リュカに傷ついてほしくなかった。

でも、私が止めに入ることはできない。私がそんなことをすれば、リュカを深く深く傷つけることになるだろう。

何故なら、この決闘では、負けた方は私に近づかない、という約束が交わされているからだ。

私がリュカを止め、王子の勝ちになってしまえば、私が王子を選んだということにもなる。そうなってしまえば、少なくとも学園に

居るうちはリュカと一緒にいることはできなくなるし、またリュカを独りにしてしまいかねない。そのとき、リュカはどうなってしまうのだろう。

この決闘を王子に持ちかけたのは、リュカらしいから、まったくもう！ どうして私のことを信じて待つてられなかったのよ！ とリュカを怒鳴ってやりたいところだ。

本当に馬鹿ね！ そんなに傷だらけになって、何やってるの！王子の方は、国王陛下達が説得して下さるそうだから、大丈夫よ！そう、怒ってあげるから、だから、しっかり勝ちなさいよ！ リュカ！

そう思っつて、私は胸の辺りで両手を組んで、リュカの勝利を祈りながら、ただじつとリュカを見ていた。

私が精霊術でも使ってしまったら、リュカの失格負けになってしまうから、ひたすら祈って応援するしかできないけど。

痛々しいリュカの姿に、鼻の奥がつんとして、泣きそうになるのをぐっと堪えて、私は組んでいる両手を握り締めた。

二人はまたグラウンドの中央辺りで向き合っつて、剣を構えた。リュカはもうふらふらで、次の一撃で、今度こそ倒れてしまいうに見えた。

対峙する二人の緊張感に、観客席にいる生徒達も息を飲んで静まり返っている。

次の瞬間、リュカがぐつと地面を蹴っつて、王子に切り掛かっつていく。それを王子が、体を翻してかわす。

剣をかわした王子の体が私のいる側を向いたとき、一瞬王子の顔が上がり、こちらを見たのが目の端に映ったけど、私の視線はリユカしか追ってなかった。

いったんは避けられた剣を、リユカが片手で横に避けていた王子の体めがけて、切り払う。

その剣が、反応が遅れ体を引き損ねた王子の横腹に当たり、王子は剣を落とし、打たれた横腹を押さえて膝を付いた。

苦痛に顔を顰めていた王子は、やがてゆっくりと顔を上げ、リユカに向かって「参りました」と声を上げた。

それを聞き受けた立会人が、「勝者！ リユカ・ディアス！」と大声で宣言すると、観客席からわっと盛大な歓声が上がった。

相手よりも小柄な体で懸命に闘ったリユカと、それに真剣に答えた王子に、生徒達から盛大な拍手が上がる。

剣を地面に転がし、両膝に手を付いて荒い呼吸を繰り返していたリユカが、ふっと顔を上げ、観客席の一番下にいた私に気付く。

そして、ぱっと泥だらけの顔を輝かせたかと思うと、よたよたと危うい動きで私の方へと歩いてくる。

今にも、地面に足を引っかけて転んでしまいそうな足取りに、私は苦笑いを浮かべて、風の精霊に頼んで、観客席からグラウンドへと下ろしてもらった。

地面に足を下ろして、少し早足でリユカに近づくと、傍に行っただ瞬間、リユカは飛びつくように私に抱き着いてきた。

ちよつと！ まだ観客席には多くの生徒達がいるんですけど！と慌てたが、リユカがとても嬉しそうに笑うので、私は仕方なくふつと溜息を吐いた。

「ねえ、アリア、見ててくれた？」

私の肩口に顔を寄せたまま、囁くように言ったリュカの言葉に、私は「見てたわよ。頑張ったわね」と返して、いつものようにリュカの背をぽんぽんと叩いた。

「うん、俺さ、本当に頑張ったよ。魔力も暴走しなかったよ」

とても誇らしげに、でもちよつと大人びた声で、リュカがそう口にするのを、私は頷きながら聞いていた。

もうね、何だか胸がいつぱいで。

リュカが無事で良かったのと、勝って良かったのと、その成長っぷりが、とても嬉しくて。自然と顔が笑みに崩れた。

その時、リュカがそつと私から体を離れたかと思うと、がくりと崩れ落ちたので、私は大丈夫かと慌てただけれど、リュカはその場に片膝を立てて跪いていて。

顔を上げて真っ直ぐに私を見上げながら、壊れ物にでも触れるかのようなひどく優しい手つきで、私の左手をすくい上げた。

こちらがどきりとするような真剣な眼差しに、凜としたその姿は高潔な騎士のように見えて。

「アリアージュ・ハージス嬢。どうか私と結婚して下さい」

乱れた髪の間から覗く金色の瞳が、大人めいた熱さを孕んでいて、吸い込まれてしまいそうだった。

ああ、これは誰？

10・彼の闘い。 後編 (前書き)

短めです。



塔へと繋がる廊下を無言で歩いてみると、ぐいとリュカの手首を握っていた手が引つ張られ、足が止まる。

どうかしたのかとリュカを振り返れば、リュカは目に涙を溜め、必死な顔で私を見ていて、何事かとちよっと驚いた。

「どうしたの？ リュカ？」

首を傾げながら、私がリュカに声をかけると。

「……アリアは、……俺と結婚するの……嫌なの……？」

さっきの落ち着きはどこへやら、ぐずぐずとした涙声で、リュカがそう問いかけてくる。

あ、そう言えばまだ返事をして無かったんだわ。

内心で、間抜けにもそのことを思い出して、私はリュカの方に向き直った。

そうして、私より高い位置にあるリュカの目を見上げながら、にっこりと笑って。

「リュカ、私一応貴族の娘なの」

突拍子もない私の言葉に、リュカが目を瞬かせながらも、うんと頷いた。

「結婚しても、たぶん今の生活水準は落とせないと思うから、それなりに収入のある人じゃないと、結婚相手として考えられないのよね」

その私の言葉に、それに続く言葉を想像したのか、リュカの顔が

どンドン泣きそうな悲痛なものに変わっていく。ぎゅっと握り締められた手が震えていて、我ながら意地の悪さに苦笑いをした。

「だから、リュカが無事この学園を卒業して、国軍の大將にまで上り詰めたら、結婚してあげるわ」

悪戯を仕掛けた時のようなにやりとした顔でリュカを見上げれば、リュカは私の言葉を反芻しているのか、しばらく動きを止めた後、ぱあっと顔を笑みに変えて、ぱっと私に抱き着いてきた。

「うん！ 俺、頑張るよ！ アリア！ 頑張って国軍大將になる！」

ぎゅっと私を抱き締めながら、髪に頬を摺り寄せてはしゃいだようにそう言うリュカに、私はそれがどれだけ大変かちゃんと分かってんのかしらと、苦笑いを浮かべてしまう。

国軍大將は、国軍のトップにあたる役職だ。それになるには、魔法力や戦闘力、実戦経験その他もろ多き多くのものが求められる。確かにリュカの魔法力は群を抜いてるけど、それでもそう簡単になれるものじゃないんだけど。

本当は、国軍大將だなんて大げさに言ってみただけで、別にリュカが大將にならなくても結婚してもいいと思っただけなのよ。

ただ、あえてこんなことを言ったのは、しばらく時間を置いて、リュカによく考えてもらうためのよね。

今回の求婚だって、王子の求婚に釣られて、というか焦った結果にしただけのような気もするのよ。

だから、もうちょっと冷静に、この学園内や外に出て、色んな経験をしたり、色んな人と出会って、そのうえで結論を出してほしい

の。

もしかしたら、それまでに他に好きな人ができるかもしれないじゃない。その可能性を、今から潰してほしくは無かったのよ。

それで、お互いに成長して、それでも気持ちが変わらなければ、例えば国軍大將になっていなかったとしても、結婚してあげるわ。あ、もちろん収入云々は気にしないわよ。私も働くつもりだし。

未だに私を抱き締めたままのリユカを、横目で見ながら、私は、ズルいこと考えてごめんね、と心の中でそつと謝った。

それでも、どこまでも純粹で寂しがり屋のあなたには、本当に大切な人と幸せになってほしいと、願ってしまうの。

## 11・彼の顔。

あれからまた季節は廻り、私とリュカは、来年には卒業を控えた、最終学年に上がっていた。

あの出来事以降、第二王子とは一切関わることは無かったし、特に何事もなく王子も去年卒業して行った。まあ、あんなことが無ければ、元々接触することも無いような方だったし、リュカも変わりにくく穏やかに過ごしていたから、王子には申し訳ないけれど、ちょっとほっとしてしまった。

しかしそんな中、王都では近頃、何やらきな臭い噂が流れていた。それは、近々隣国が攻め込んでくる、というものだ。

隣国は、この大陸に存在する三国のうち、私のいる国と、もう一国に比べて国土が小さく、そのため領土を拡大しようと度々隣国を攻めたりしているらしい。とはいっても、ここ十数年侵攻は無かったんだけど、最近国王が代わって、また侵攻する計画を立てているみたい。

学園内も先生方なんかはちょっとピリピリしてるけど、それでも隣国に今の時点では目立った行動は無いということで、授業等は通常通り行われていた。

そして、最終学年のカリキュラムとして、十二人ぐらいが一チームになって、砂漠や森の中、無人島等で実習が行われるのよ。引率の先生は基本二人で。

私達のチームは、不安なことに侵攻が危険視されている隣国との国境の端の方にある森だった。まあ、国境といっても、二国の間には険しい山脈と深い森が横たわっているから、隣国がここを侵攻ルートにはしないだろうという、考えがあつてのことだったんだろうけど……。

しかし、現在ひじょーにピンチです。

何故かというと、実習地に到着した私達は、森の中で僅かに開けた平地にテントを張って、野営の準備をしていたところ、薪を集めるために山に入った先生と男子生徒数名が、隣国から侵入してきた兵士達に出会つてしまつたみたいなの。

その兵士達は、諜報部隊なのか攪乱のための部隊なのか、人数は八人とそんなに多くなかつたんだけど、こちらは実戦経験の無い学生達、それに比べて、向こうは少数精鋭の熟練兵士達のようなのよ。

森の中から逃げ帰つて来た生徒の話によると、森で薪を拾つていたところ、隠れつつこそそ移動していた兵士を見つけてしまったらしい。ちよつと、そんなあつさり見つかつてどうなのかとも思うけど、向こうもこんなところに人がいるとは考えていなかったのだろう。近くに民家もないしね。

それで、国軍に連絡させないよう口封じにと、兵士達が攻撃を仕掛けてきたのを、先生が対応しながら生徒達を逃がしたのね。そして、森から野营地まで逃げ出してきた生徒達と、その後に先生が出てきたんだけど、先生は全身傷だらけの重傷を負っていた。

まあ、確かに精鋭の兵士達数人を相手に、恐怖で動きの鈍い生徒を庇いながら戦つてたんだから、命があつただけでも良かった、つて状況だったんだけど。

というわけで、私は、野営地の一角の木が無い辺りで、ちょうど一緒に食事の作業中だった数名の生徒を囲むように、急いで精霊術で光と風の二重結界を張り、傷だらけの先生を風の精霊術で結界内に運んで、救護担当の女の子が先生を治療しているところです。

そして、結界を維持しながら周囲の状態を窺っているところなんだけど、こう、淡々とした口調でここまで説明したけど、状況はかなり緊迫しているのよ。

現在、私の結界の中には、負傷した先生と、同じくとっさに現れた兵士に対処できず怪我をした生徒が二人、非戦闘員である救護担当の女生徒と、援護担当の男子生徒がいる。結界自体は、慌てて張ったものの半径三メートルほどのドーム型だから、狭いってわけではない。

ただまずいのは、他の生徒達ともう一人の先生と、分断されてしまったってことだ。

こちらも四人の敵兵に囲まれ、攻撃の隙を窺われているけど、とりあえず、結界内にいれば、魔法であっても武器によっても攻撃を受けることはない。けれど、向こうは戦闘担当の生徒六人と先生が固まり、周囲を四人の兵士達に包囲されつつあるようなの。彼らも応戦はしているんだけど、何より体格も経験値も、全く違うから確実に押されている。

さっき先生が救援要請を魔法で送っていたから、しばらく持ち堪えれば、近くに駐留している国軍が来てくれると思うんだけど、あちらの生徒達がそれまで殺されない可能性は、きわめて低いように思えた。

そこで、私ははたと、リュカの姿がどこにもないことに気付いた。そういえば、リュカも私と同じチームだけど、薪集めの担当になったために、不貞腐れながらも森の中に入って行ったんだった。

最近は以前にも増して、リュカと一緒にいることが多かったから、

傍にいるものと思い込んでたみたい。

約二年前の王子との一件以来、リュカは魔力を完全にコントロールし、剣の訓練にも励んだせいで、学園内では先生を含めリュカに敵う人はいないと言われている。

そんなリュカだから、森の中で敵兵にやられたなんてことは無いと思うんだけど……。

もう！ こんな時にどこ行ってんのよ！ ともどかしく思いながらも、結界を維持するために円の中央に立ち、結界内にちらりと視線を走らせるけど、誰もあちらを助けに行けそうにない。

だから私が戦わないと。

そう考えて、ぞくりと腹の底が冷えた。

私の進路選択は神殿勤務で、軍に入るつもりはないけれど、でも学園でのカリキュラムに、いざというときのための戦闘訓練も含まれている。

その授業では、私も風の葉で対象物を切ったり、火で燃やしたり、チームに分かれての対戦形式の訓練では、土で作った落とし穴に、敵チームの生徒を落としたりもした。

けれど、それはあくまで訓練で、基本的に対象は人形だったし、人に攻撃するために精霊術を使ったことも無ければ、実際に人を傷つけたことも無い。

しかし、これは授業ではなく、敵兵とはいえ人を傷つけるために精霊術を使わなければならない。

そのことに、やけに喉がカラカラになって、手が震えた。

誰かを傷つけることが怖い。殺してしまうかもしれないこと

が。

駄目なのよね、これは日本にいた頃の記憶があるせいかもしれないけど、戦う相手にも死んだら悲しむ人が……なんて考えだしちゃうと、もう攻撃することが本当に怖い。全身が震えて立っていないほどに、怖い。

前世は日本の一般的な家庭で生活してたから、虫を別にして生き物を殺したことは無かった。愛犬が寿命で死んでしまったときは、その死が辛くて悲しくて、愛犬のことを思い出してはよく泣いていた。

この世界でも、幸いにも貴族の令嬢だったから、食べるためにこの手で生き物を殺すなんてこともしなくてすんだ。

だから、生き物を殺すという行為は、ずっと遠いところにあつて。確かに、前世でこの世界に召喚されたとき、多くの魔物を殺したわ。でも、その時はとにかく必死で。魔物自体も奇妙な形の獣だったから、これは生き物ではなくただ悪なのだと、倒さなければ自分がやられるのだと、我武者羅に自分に言い訳して戦っていた。結局人の姿をしていたのは魔王だけだったし、もう魔王と戦ったときはどこかおかしくなつてたんだと思う。でも、あんな思いはもう二度とごめん。

地球に戻つてからも、何度も悪夢に魘され、しばらく眠れない夜が続いた。あの地獄のような光景は、結局死ぬまで頭から離れることは無かった。

そんなことを考えて、躊躇っているうちに、生徒達と先生を囲む敵兵の輪は小さくなって、生徒や先生の疲労が見て取れた。

わああ！ と悲鳴が上がる。生徒を庇いながら応戦していた先生

が、横からの敵兵の攻撃に肩口を切られたのだ。

ざっと頭から血の気が引いた。

そうだわ、私が躊躇っていれば、仲間の生徒達や先生の身が危ないんだ。

ぐつと唇を噛み締めて、覚悟を決めた。

精霊に頼んで、敵兵への攻撃のための精霊術を使おうとした、その時。

空からバスケットボールぐらいの火の玉が、ゴツという風を切る音と共にいくつも降り注ぎ、敵兵の周囲に着弾したと同時に、いっせいに燃え上って兵士達を取り囲んだ。

突然の、どこからとも分からない攻撃に、兵士達が動揺しながら辺りを見回していると、すっと一人の兵士の傍を一つの影が過ったかと思うと、その兵士がその場に崩れ落ちた。

それを見た傍にいた兵士は、驚愕の表情を浮かべる前に、ドサツとその場に倒れ伏す。

残った二人も、武器を構える間もなく、次々とその場に沈んだ。

気が付けば、そこにいた生徒達も先生も、その隙にどこかへ避難したのか、火の向こうにはいなかった。

まさに一瞬のうちに起きた異常事態に、こちらを見張っていた四人の敵兵も周囲を警戒しながら、攻撃態勢のままそちらの方へ足を向ける。

しかし、火の壁の向こうから突然襲い掛かって来た細い竜巻に、前にいた二人が吹き飛ばされ、背後の木の幹に激突して崩れ落ちた。そして、それに気を取られた残りの二人も、風を纏って瞬時に現れた影に、対処のしようの無いままあっさりとその場に倒れた。

数分にも満たない間に片付いた敵兵達に、みな驚きの表情で、ここに何事も無かったかのように佇むリュカを見ていた。魔法によって生み出された火はいつの間にか消えていて、ザザツと木の間を渡る風の音のみが、その場を包む。

リュカの持つ訓練用の剣は血に染まっており、リュカの手や服にも血が飛び散っていた。

さっきの鬼神のような強さと、その血に染まった姿に、リュカを見る他の生徒達の表情に怯えの色が混ざる。しかし、そんな目を向けられながらも、リュカは真っ直ぐに私を見ながら、安心したように静かに笑った。

この数年で、背も伸びて私とは頭一つ分の身長差ができたし、体も細身だがしつかりとした筋肉がついて、男の人の体つきになった。そして、以前は幼くて可愛かった顔立ちも、今ではどこことなく甘さを含んだ端正な、美形と行っても過言ではない顔つきになっている。そのため、その容姿と、魔力が抑えられるようになったおかげで接しやすくなったと、リュカを見てきゃーきゃー騒ぐ女の子達も増えた。

魔法の技も剣の腕も、以前とは比べ物にならないほど成長し、強くなったため、リュカに憧れる生徒も多い。

そうして多くの人に慕われながらも、今でも、独りにされるのを、人から怯えた目で見られるのを、心から怖がっているくせに。

どこまでも純粹な、まるで悟りきったかのようなリュカの笑顔に、私は胸が苦しくなって、気が付けばぼろぼろと涙を零していた。

そのまま、結界を解いて、リュカの方へと小走りで近づいて行く。

傍に来た私に、驚いた表情になったリュカが、そつと涙を拭こうと手を伸ばし、自分の手の状態に気付いてその手を下げた。

そんなリュカの行動に、私は涙が止まらず、ついには両手で顔を覆い嗚咽を漏らした。

「アリア……」

「……ごめんなさい……リュカ……」

困ったように私を呼んだリュカの声に被るように、私は声を発した。呼吸が喉に詰まって苦しく、はつきりと声が出せないのもどかしく思いながら、それでも必死に言葉を重ねた。

「私が……術を使うのを……怖がったからっ……リュカが……！」

詰まりながらも精いっぱいのでそう言えば、驚いたように目を瞞ったリュカは、やがて包み込むような柔らかい笑みを浮かべ。

「いいんだ。アリアの力は優しい力だから、誰かを傷つけるために使って欲しくなかった」

そう言って、背を屈めて私の額にそつと口付けた。

間近で見上げた金色の瞳は、優しく細められていて。ああ、いつの間にかそんな顔ができるようになっていたの。

見たことの無いような大人びた笑顔に、驚きと共に包み込まれるような暖かさが胸に満ちた。

リュカが私から体を離れたとき、そんな私達のやり取りを見ていた生徒達が、何かに納得した顔だったり、ちよつとバツが悪そうな

表情を浮かべたまま、次々とリュカの背中や肩やらをぼんぼんと叩いて、「助かった、ありがとう」やら「悪かった。おかげで命拾いしたよ」などと口々に礼を述べていく。

その表情に怯えは無く、リュカに触れる手にも躊躇いは無く、彼らの行動に、戸惑ったような顔をしたリュカに、私は嬉しさで笑みが浮かぶのを堪えられなかった。

ああ、良かった。彼らにも、リュカがただ暴走したわけではなく、ただ戦闘に狂ったわけでもなく、誰かを、そして私を助けるために、あえて自分が戦いの矢面に立ったのだと、分かったのだろう。

強すぎる力は怖くて、時に味方であっても脅威になりうるけれど、リュカは意味なく人を傷付けたりはしないと、それが皆に伝わったようで、私はほっと胸を撫で下ろした。

リュカにお礼を言った生徒達は、照れくさいのかまだちょっと気まずいのか、リュカの肩を叩いてそのまま傍を通り過ぎるように、事態の後片付けに向かって行った。

しばらく彼らの後ろ姿と、私の笑みの浮かんだ顔を交互に見ていたリュカは、やがて私に顔を向けたまま、眉を下げて泣きそうになりながら、嬉しそうににっと笑った。

そんなリュカに、私はそっと近づいて、つま先立ちになり、リュカの頬に口づけた。

「助けてくれて、ありがとう」

元の位置まで下がって、リュカの顔を見上げながら笑ってそう言えば、呆気にとられたようにぼかんとした表情を浮かべていたリュカの顔が、見る見るうちに赤く染まっていく。

やがて、頭から湯気でも出そうなほど真っ赤になったリユカは、腕組みをした両手の間に顔を埋めるようにして、その場にしゃがみ込んでしまった。

耳も首も赤くなったりリユカをつむじを見下ろしながら、変わらぬリユカの一面に、どこか安心したのも事実だ。

その後、的確に急所を突かれ、命に別状はないものの、身動きができないように傷つけられていた敵兵達を、精霊術で治療しながら拘束し、ようやく到着した国軍の兵士達に引き渡した。

二名の生徒以外に怪我を負った者はおらず、その生徒達の治療も無事終わっている。二人の先生達も救護担当の子の治療のおかげで、後で輸血は必要だけでも、受けた傷は治っていた。

こうして、私達の波乱の実習はどうにか幕を閉じたのだった。

あ、最後に、リユカにどこに行っていたのかを聞いてみたところ、私と別の分担になったのにちょっと不貞腐れていたのと、それならたくさん薪を持って帰って褒めてもらおうと、張り切って森に入って行ったために、気が付けば森の奥深くまで入りこんでしまっていて、事態に気が付かず、帰るのに時間がかかったのだそうだ。

理由は可愛かったんだけど、ヒーローとしてどうにも締まらないリユカに、つい苦笑いを浮かべてしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1009t/>

---

廻り廻るわたしと きみと

2011年10月1日22時38分発行